

第8回ZOOM寺子屋(2021.5.8) 感想(質問)

感想(質問)をお書きください。

デザイン思考を授業デザインやコースデザインにどう活かすか、また現在教育の現場で多くの教師が実践を試みているPJ学習、問題発見型、構造主義、スモールステップ等と違いはあるのか、という問題意識を持って勉強会に臨みました。共感がsympathyではなくempathyという視点が、教師側から「与える」ではない授業につながると実感できました。スモールステップについては、デザイン思考を実践する際の方法のひとつであると捉えましたが、それでいいでしょうか。先生がおっしゃっていた、授業のカリキュラムやコースデザイン全体をデザインしようとするのが難しければ、できることから少しずつ実践していけば、というアドバイスを鑑み、私が日々少しずつ改善や実践をしていることもデザイン思考につながっているのかなと思いました。

また、現在、大学院で実践研究を構想中で、そこにもデザイン思考をどんどん活用しようと思います。

まずやってみる。できることを探す。完璧主義にならない。

私にとって、まさに思考のマインドセットとなる学習機会になりました。ありがとうございました。

デザイン思考についてどう自分のフィールドで活かすかについて考えましたが真っ先に難しいと感じていました。つまり動きださないということです。

ブレイクアウトルームでも同様の意見がありました。「そうだよね!」と同意があったこと、共感にうれしさも感じてしまいました。

しかし、その思考こそがマインドセットするべきポイントでした。

門倉先生に質問をしました。先生から小さく始める。実行できそうなものから取り掛かる。完璧主義にならなくていいなどの言葉は、私にとって重要なマインドセットになりました。できそうなことから「見える化」してみます。ありがとうございました。

今日の門倉先生のお話を実際のニューデリーにある日本語教育現場を思い浮かべながら拝聴しておりました。このデザイン思考をどのように導入していくか、また、学習者たちが興味を持って取り組めることは何だろうかと考えていました。日本語センターは、民間の日本語教育機関ですが、高度人材の育成、日本で研修をうけるエンジニアの教育、一般向け(将来インドの日系企業もしくは日本にある企業で仕事をしたい学生やアニメが好きで日本語を勉強したい学生など)、技能実習生の日本語・文化教育など様々なコースがあり、コースによって学生の興味も違うと思いました。また、インドは大国なので、出身州による文化の幅が広く、特に北東インド(ミャンマーの隣)など、全く違う文化や考え方なので、学習者の文化・バックグラウンドをもっとよく知らなければならぬと痛感しました。昨年3月のコロナ禍からずっとオンラインで研修やクラスを実施しており(現在も私は日本からオンラインで続けています)、特にオンライン教育では、「自律した学習者」になれるかどうかで、その後の学習者の日本語習得が明確に分かれていくと実感しており、そのためにも学習者のマインドセットに日々どのように働きかけていくかが課題だと考えています。(これは、起用し側も同様です)今日のお話をヒントに少しずつデザイン思考を授業に取り入れていこうと思います。門倉先生、嶋田先生、皆さま、今日は本当にありがとうございました。

(感想) デザイン思考は自分がめざす日本語教育と理念のところで共通していると感じ、大変うれしかったです。御訳稿と共に「読み方」を、見本を見せてご紹介いただいたことが大変ためになりました。訳稿ではデザイン思考はスキルであるとして、その学び方が具体的に示されていたことも勉強になりました。これまで漠としていたデザイン思考について理解が進んだところで、次は小さなことから、言語教育にあてはめて具体的に考えてみたいと思いました。充実した時間をありがとうございました。

(質問) 訳稿「はじめに」のp.10には「勝ち残る」「成功する」「生き残る」と3つの似た表現がありますが、これらはこの文脈の中で同義ですか。デザイン思考自体には大いに共感するのですが、これらの言葉には、何をもち「成功」と捉えるのか、現代を生きる人間に向けた価値観が含まれているように思えて気になりました。

翻訳の過程で試行錯誤もあったことと思いますが、専門用語として定訳のあることば、概念を含めて、カタカナ語としたもの等、訳注のあるものは余計に考えながら事前課題をしましたので、ラインマーカーで記したのは、ことばの定義的な部分が多かったです。たとえば「エンパワー」ということばは、周縁に置かれた外国人や非識字者が学びによって生きる力をも培うことだと思いました。

学習者が他者の問題にも共感を持って課題解決することに、とても興味は持てるものの、コースをデザインする時に、学習者のニーズに共感を持つことは、いくつもの制約があるように感じます。言語知識だけでなく、社会とつながる、当事者として「声」を持つ、多文化を背景とした人と協働するなどいろいろなメリットもあるということなど理解できました。インタビューなり、教室外の活動なり、できそうなことを突破口にして、実践してみたいと思います。

時間があっという間に過ぎてしまいました。門倉先生、嶋田先生、参加者の皆様、ありがとうございました。充実した時間になりました。

初めて聞いた「デザイン思考」のお話はとても興味深く、とてもわくわくしました。教室でこれを用いるには、まず教師が頭も体も柔らかくして、一緒に考えていく姿勢を持つことが大切だと思いました。

もう少しディスカッションの時間があつたら...と残念に思いました。日本語教育にどう生かすかというところを参加者の皆さんとお話をしたかったです。個人的には、第3章に書かれていた「フェーズ」という考え方を持つことが大事なと思いました。日本語教育の中で、例えば、ある文型や語彙が使えるようになるまで！ということが言われることがあります、それができないと次に進めないというのは「段階」的な考え方なんじゃないか、教師が「フェーズ」という考えを持てたら、今できなくてもとりあえず次に進み、途中で戻ったりしながらできるようになっていくという考え方ができるのではないかと思います。

門倉先生が一度に全部ではなく、できるところからやっていたらいいのではないかとおっしゃっていましたが、教師の考え方を変えていけたら、授業のあり方も変わっていくと思いました。そう考えると、日本語だけを学ぶのではなく、日本語で何をしたいかということも教師も学習者も考えていくことが重要になっていくと思います。今日、学んだことを来週からの授業の中に少しでも生かしていきたいと思っています。ありがとうございました。

本日は、大変有意義な時間をありがとうございました。門倉先生や嶋田先生、みなさんのお話やご質問を聞いて、少し具体的に描ける部分も出てきたように感じます。今、浮かぶことを以下に記します。

【日本語教育におけるデザイン思考の取り入れ方について】

たとえば現在単元に関連するものについて意見をまとめてポスターを作ったり発表したりしている活動に、デザイン思考の5つのフェーズを部分的に、段階的に取り入れていってはどうか。案1) テーマは学生が自身の経験から考えられるものをいくつか経た後、地域の問題や立場の違う人たちの問題へと移行する。観察やインタビューの間に自身の意見を展開しないことに留意して共感フェーズを取り入れる。案2) 来日する学生のために自分たちがあつたらいいなと思う案内やサービスを考え試作する。実際に次の入学期に来日する学生たちに使ってもらい、検証、改善を行う。

【日本語教育とデザイン思考】

日本語を身につけて社会で活躍できることを目指すという意味で、日本語を学びながらデザイン思考が身につけられれば一石二鳥と言えそうだ。“他者の目を通して世界を観察し、他者の経験を通じて世界を理解し、他者の感情を通じて世界を感じ取る努力”とされる共感とは、多様性や異文化の理解にも通じるように思う。身のまわりのことを「なんで？」という視点で捉え、既成概念にとらわれず課題解決手段を提案する分析力や柔軟性、それを形にする行動力やチャレンジ精神を日本語を学ぶうちに身につけられるとしたら、どんな立場で日本語を学ぶ人にとっても、日本語教育は一層価値のあるものになるのではないだろうか。

【自分が意識して取り入れたいと思ったこと】

1つは、共感のフェーズで大切だと書いてあつた自分の評価を加えず、相手の話をよく聴くということ。知らず知らずのうちに自分の中で判断しながら人の話を聞いていることが多いような気がして、意識的に取り組んでみようと思った。共感フェーズで行うインタビューでは、話の内容をはっきりさせるための質問だけを行うという点にも留意したい。

もう1つは、イマージョン。p.47にある例を読み、自分にもこのような視点が必要なのではないかと感じた。新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、ちょうど来週からまた授業体制が変更になる。学生にも先生方にも様々な授業形態への対応を求める状況が続く中、少しでも学生たちが学びやすい環境や体制を整える必要がある。そのためにイマージョンという方法も取り入れてみようと思った。何かを考える時、相手の立場に立ってみるといことはやはり重要だと思う。

以上です。長くなってしまいました。今後とも宜しくお願いいたします。

「デザイン思考」をどのように己の日本語授業に落とし込んでいけるか、「教師はファシリテーター」を常に頭の隅におき、学習者主体の学びを目指していきたいと思ひます。

学習者に対して実践する前に、まずは自分が変わらなければ！変わりたい！と思ひています。本を読み始めたときに「小学生にデザイン思考の授業は難しいのでは」と感じていましたが、それはまさに、私自身が何も知らず無理だと決めつけてしまっていたのだと、気がつきました。他者への理解の前に、まず自己理解。自分のアイデンティティーや偏見と向き合い、考えてみます。

また、デザイン思考を身につけることは、生きる力・生き抜く力を身につけることになると感じています。今関わっている児童・生徒の明るい将来につながるよう、できることから授業に取り入れていきます。

貴重なお話を聞かせていただきまして、本当にありがとうございました。

【質問】

1. 自分のことを知るの、簡単ではないように感じています。人との対話を重ねること、自問自答をするなど、日々努力・・・でしょうか。先生はどのようになさったか、また学習者にどのようにご指導されているのか伺いたひです。

2. 自分の評価を加えないで相手の話を聴く、質問をするには、質問する「技術」が必要だと思ひます。自分の評価がなければ、相手の言ったことに疑問を持ったり、違和感に気が付かず、深い質問が出てこないのではないかと感じていました。この点についても、何かポイントなどございましたら、教えていただきたいです。

よろしくお願ひいたします。

門倉先生、嶋田先生、皆さま、zoom寺子屋では有意義な時間をありがとうございました。事前学習でのわくわくも含めて、新しいことを学ぶ楽しさを再確認することができました。

デザイン思考の考え方やマインドセットひとつひとつは全く新しいことではなく今までも言われてきたことも多いと思ひましたが、その全体としての価値観と道筋は何かを考え、形にするときの方法の一つとして、大きな可能性を持っていると感じました。

ビジネスやイノベーションの領域で成長してきたこのデザイン思考を、日本語教育をより良いものにするためにどう使っていくことができるか、私たちのチャレンジだと思ひます。皆様と一緒にこのデザイン思考に出会えたことに感謝です！引き続きどうぞよろしくお願ひいたします。

<感想>

今回、アクラス寺子屋に参加することで、「デザイン思考」を学び、私の中にさわやかな新しい風が吹いてきました。

私は、教師をデザイナー、学習者をユーザーとして考え、『デザイン思考』を読み進めていきました。「デザイン思考」を通して教育実践を振り返ると、今直面している問題を解決する糸口が見えてきました。それは、「共感のフェーズ」の「観察」（当たり前前行動やモノを犯罪現場の刑事になったつもりで見つめなおす活動）と「イマジネーション」（学習者の行動を教師も実際に行う活動）から大きなヒントを得たからです。

また、「デザイン思考」を部分的に取り入れることで、小さい試みですが、新しい授業実践を展開することもできました。それは、「デザイン思考は失敗を許容します。失敗から学び楽観的で熱心な態度によって解決に向けて改良を続けていこうとする」という言葉に背中を押されてできた実践です。

今、デザイン思考により新しくマインドセットした自分にちょっとわくわくしています。引き続き、デザイン思考の学びを進め、教育実践に生かしていきたいと思ひます。

「デザイン思考」を教えてくださいました門倉先生、アクラス寺子屋で学びの場を作ってくださいました嶋田先生、どうもありがとうございました。

大変刺激&収穫の多い寺子屋に参加させていただきました。

また、BO後の皆さんの感想・ご意見で、同じような悩みも抱えていらっしやることがわかり

一人ではないんだと・・・

デザイン思考を日々の授業にどのように取り入れるか、まず自分のマインドセットを常に意識して行こうと思ひます。そして門倉先生の「部分的な取り組みでもOK。失敗をおそれない。」というお言葉を意識しつつ考えようと思ひています。

さらに「目次を熟読する」ということも。

諸々、得ることが多い時間をありがとうございました。

今回も大変有意義な時間を皆さんと共有させていただくことができました。私たち教員は自分の授業を客観的に観察することもなく、他の先生の授業を見る機会も限られています。知らない間に自分本位の授業スタイルになっている可能性も否めません。今回のお話を伺って、今一度誰のための授業なのか、自分は受講者にとってどのような存在なのかを自分自身に問い出してみる必要があると感じました。新たな気づきの機会を与えてくださり、本当にありがとうございました。

訳稿を読ませていただき、セミナーでお話を伺うことができ、「デザイン思考」に出会うきっかけをいただけたことに大変感謝します。まだまだ消化しきれませんが、訳者ご自身のコメントや数々のリンクもありがとうございました。

はじめは、「何を学ぶかよりも、いかに学ぶか」ということで、デザイン思考とは、学習プロセスを言っているのだろうと思いつつ、読み進めました。しかし、重要なのは文化やマインドセットであることが分かり、プロセスを経験することで、マインドセットも形成されていくことが分かりました。

デザイン思考の5つのフェーズは技術として、カリキュラム作成や人生における問題解決場面で、考え方を整理するときに使えらると思いますが、それだけでなく、デザイン思考を基にした教育活動が社会を変えていく力になるのではないかと思います。

まず、「共感フェーズ」における共感が自然に湧く感情のsympathyではなく「他者に純粋に共感するためには、生徒は自分たちの偏見や思い込みを自覚し、それを脇へ置いておく必要がある」empathyであること。この「共感力」を養う訓練は多文化共生社会を創っていく上で必要なことだと言えます。

この時の「気づき」が次の「定義フェーズ」につながっていきますが、門倉先生が「気づきはinsightです。」とおっしゃったのを聞き、今まで、自分が「発見」と「気づき」を混同していたことに気づかされました。違いの例(P67)のように「気づき」は目の前の事象を発見するだけでなく、一步深い考察があるということが分かりました。これはジョン・デューイが「私たちは経験からは学ばない。経験を振り返ることによって学ぶのだ。」と言っていることに似ていると思います。したり見たりしたままでなく、それはなぜかと思いを巡らすことが必要だということですね。

また、問題定義文の立て方で、「津波の被害を減らすために、どうしたら波を防ぐことができるだろうか?」ではなく、「私たちはどうしたら津波から人々の安全を守れるだろうか?」の方がより広い視野から解決案を展開することができると書かれていますが、生徒たちはこのような問いの立て方を訓練することで、何が目的で何が一番大切(critical)かを見抜く力がついてくると思われます。

プロジェクト学習は「実社会を教室に持ってくる」と書かれているように、日本語教育への応用としては、デザイン思考を知ること、授業でプロジェクトワークをするときの基本的なマインドセットがまず教師にできることが挙げられます。これにより、表面的ではない本物のプロジェクト遂行が目指せるかもしれません。

門倉先生がコメントに書かれているように、「オンライン・コミュニケーションの普及によって、教室に「社会の風」を入れやすくなった。」ことはオンライン授業をやってみて、私も感じました。例えば、方言についての読解をした後、学生が質問を考えて、地方に住む友人をゲストスピーカーとしてZOOMに迎えることもできます。

また、単純なことですが、「失敗を受け入れる」マインドセットの育成は言語の運用練習でも同じだろうと思います。

「教育における私の目標は、できるだけ多くの生徒をエンパワーすることです。」という考えにとっても共感します。「教室で生徒に本物のテーマと経験を与え、将来、社会に出てからの活動で成功するために必要なスキルを身につけさせることによって生徒をエンパワーできる」ことが日本語教師の望みでもあるのではないのでしょうか。

(長文ご容赦ください。)

感想：Youtubeを見てみたり、ネットを検索してみたりしながら、いただいた訳稿を改めて読み返して、全体のイメージがつかめてきました。マインドマップの手法で、語彙マップを自由につくってみたりすることは以前からやっていましたが、ブレインストーミングの方法も色々ありそうなので、ご紹介いただいた本など、更に勉強して、取り入れられるものは試してみようと思います。共感マップは、学習者を分析する上でも使えると思いました。コロナが終息すれば、またレベル差の激しい30回弱のグルーブレッスンも再開するかもしれないので、その時に活用できればと思います。

質問：私が担当しているのは、社会人の企業内のレッスンなので直接は関係ないのですが、お聞きしたいことがあります。

デザイン思考では、出てきたアイデアについて、いい、悪いで評価をしないで、もの足りない部分は提案などプラスしていき、より良いものを作り上げていくと理解しました。

学校では評価がつきものですが、（評価したくなくても単位認定などつけなければならないとき）どのような形で、どんなところを見て、評価をしていくのでしょうか。

「デザインのためのデザインが横行している」という言葉にハッとしました。これもある意味「自分探し」の状況なのかなとも思いました。あと「他人の担架に乗る」という例が印象的で、相手の状況を部分的にイメージするだけではなく”その導線”に浸ってみることを自分もやってみようと思いました。そして試作フェーズでの「作りながら考える」「完璧を求めない」「反復を恐れない」という言葉に勇気づけられました。ビジネスだけでなく教育にもどんどん取り入れられていくといいなと思いつつ、まずは個人から部分的にでもいろいろ実践したいと思いました。ありがとうございました！

とても中身の濃い、また壁にぶつかっていたりした面などへの新しい風をいただきました。

留学生をメインに教えています。が、「デザイン思考」という言葉には、とても広範囲、奥深いものがあり、日々行っている授業への振り返りにもなり、見方を変えることなど、言葉では言い尽くせない学びがありました。

留学生の現場では、日本語学校も専門学校も、たぶん大学なども同様かと思いますが、ピアラーニング、リーディング、PW,等々、様々な活動時に、その活動過程において母語使用という悩みがあります。この「デザイン思考の面白さ」からは外れた質問になっているかもしれません。が、母語使用はどの学校さんでも悩まれているのでは、、、と思います。その場合、やはり目的・目標などの面から、また「デザイン思考」という面からも、「他者のニーズに気づく」へのstepとして、・・・どこまで許容??なのか。すみません。低レベルの質問でお恥ずかしいです。講師はどうあるべきか、、、など、考えさせられます。

ファシリテーターとして、、、考えさせられました。

いい学びの場をいただきました。ありがとうございました。疑問点はたくさんありすぎて、書ききれません。MLを活用させていただけることに感謝いたします。

門倉先生、嶋田先生ありがとうございました。

実は、読後どのように授業に取り入れたらいいのだろうかと思わずに少しばかり距離を感じていました。ですが、直接お話を聞いて「何を学ぶべきか」よりも「いかに学ぶべきか」つまり「学ぶ方法を学ぶ」だったということ一第1章のしょっぱなに書かれているのに一この肝心の部分が抜け落ちていたことに気づきました。また、「部分的にでも取り入れたらいい」とのアドバイスがありました。前期で計画している活動の中に入れ込んでみました。取り入れながら、結果をみなさんと、共有できていけたらより明確につかめていけるのではないかと考えています。

1点教えていただきたいです。今まだはっきりつかめていない点がありまして、

「共感」についてです。例えば、今進めている授業の、文系のライティングの活動の目的文に「社会と、あなたの人生にどのようにかわるのかを考えた」と付け加えてみました。また別の教科の活動目的に「あなたたちの将来、子どもや孫のことまで考えた」と入れました。このような視点は、「共感」＝「他人の身になって」＝「ユーザーを理解しようとする」こととつながるのではないかと考えましたが、ずれているでしょうか。

お聞かせいただけたらありがたく思います。

よろしく願いいたします。

門倉先生のゼミに参加したような、そんな雰囲気の中で学ぶことができました。全てが勉強になりましたが、特に「目次読み」に大変感銘を受けました。どのように読んでいけばいいのか、実際を見せて頂くことで、ストンと身に落ちた気がします。実践していきたいと思いました。また「デザイン思考」について、「全部取り入れる必要はなく、できるところから」というご説明も大変納得ができました。今後、頂いた翻訳を、章ごとに読み返しながら、取り入れていけるのではないかと考えています。ありがとうございました。

ZOOM寺子屋ではいろいろなことを教えてくださり、ありがとうございました。また、貴重な資料も送ってくださり、感謝の気持ちでいっぱいです。

訳稿に書いてある内容は素晴らしいことばかりですが、どちらかというと理系向けに書いているように思われ、実際どのように自分の日本語教育に結びつけたらいいのかという疑問がありました。でも、寺子屋に参加して、デザイン思考が目指すものは分野が何であれ共通であり、先生がおっしゃったように「少しずつできるところから見つけてやってみる」ことが大切だと気付かされました。

授業は失敗したくないという気持ちがどうしても強くなってしまっていますが、授業も実は「試作」の連続（←毎回同じ授業はありえないため）で、「とりあえずやってみる」ことことを恐れてはいけないと思いました。

デザイン思考の工程の中では「問題を見つける」というのが一番難しいのではないかと思います。皆が主体的に動いたら良いのですが、そうでない学習者をどのようにして「問題を見つける」ところまで持って行ったら良いのかなと思いました。

また、デザイン思考の中で「共感」が一番重要なように感じたのですが、共感できない場合はどうしたら良いのかというも疑問に残りました。反発や疑問から問題意識を持って出発することもあるのではないかなと思ったのですが、デザイン思考で言う「共感」は、文字通り「わたしも同意見です」という意味での「共感」が求められるのでしょうか。

デザイン思考を実践されている方の実践例を伺えたらうれしいです。

「デザイン思考」を教育に活かすことが、これからの人材育成に必須であることがよくわかりました。プロセスと方法が確立していることは導入の手助けになると思います。価値観やマインドセットを鍛えることによって創造的な成果につながり、能力が飛躍的に伸びると思います。機会を見つけて実践したいです。

今回の寺子屋は事前の課題を読み進めているときから、ワクワク感がいっぱい、久しぶりに大学のゼミに参加するような気持ちで臨みました。

BORでお話した方たちとは、自分たちが普段、日本語の授業をしているときには「教師」＝ファシリテーター／デザイナー。「学習者」＝デザイナー／ユーザー。の二つの側面があるということ。また、自分自身がファシリテーターとして授業を進めるとすると、その力は自分に備わっているのか。など、事前に感じていたことをお互いにたくさん話すことができ、10分間があっという間でした。

さらに、後日、勤務先の学校へ行く途中で、同じ学校の同僚で寺子屋に参加していた方と出会い、すぐに教室デザインの話題になりました。学校までの道を「どんなふうに授業に生かそうか」「私はちょっとやってみた」など、ワイワイ話しながら歩きました。

翻訳を読み進めているときから、自分自身の授業と照らし合わせていましたが、これからはずっと頭の中において授業を考えていきたいと思います。

充実した時間を本当にありがとうございました。

Breakout Sessionから全体に戻る時にZoomがシャットダウンしてしまいました。戻るのに時間がかかり途中で参加が遮断されてしまったことが心残りではありません。すみませんでした。しかしmeetingに臨む前、そして終了後、お送りいただいた本の試訳を読みながら静かな興奮と深く湧き上がる喜びのような気持ちを味わうことができました。貴重な体験をありがとうございました。アメリカ在住時、勤務先の公立高校の関わりで州の教育委員会主催の21世紀の子どもたちのための教育というシンポジウムに参加したことがあります。そこで21世紀に求められる人材の姿として、彼らは一生のうちに最低10回くらいは職を変え、相当範囲の多岐にわたる分野であらゆることをそつなくこなしていく能力が求められる、また現在あるようなethicsは希薄になり、器用に柔軟にさまざまな事象の側面、問題に対応していかなければならない、という視点を提示していました。教員に今後の教育について考えさせる機会を与えるものでした。今から10年前のことです。当時かなり衝撃的な思いを持ったことを覚えています。しかし、今回、この勉強会のデザイン志向のプロセスと実践とマインドセットを主軸にしたPBLは、日本でも、21世紀に必要なスキルを学生に伝えるために、その時の思いが現実的に実行される機が熟したことを実感させるものでした。・協働的なディスカッションや身体を動かす体験型の活動や振り返りによって参加者に教育的な課題について深く考えさせる機会を提供する。・教師は生徒に決まりきった活動ではなく自由な裁量で必要な活動を含んだ学習経験を提供する必要がある。等々、非常に共感し、お粗末ながらも自分自身が授業の中で少しではありますが似たような意識のもとで展開としている実践の志向に対して勇気をもらい、力づけられ、さらにもっと理論的、体系的に学んだうえで授業計画を立てていこうと前向きな光を見ることができたように思います。現場にいて最も大変なのはマインドセットのところのように思います。さらにもっと深く著書を読み込み、じっくりと考えながらPBLに向き合っていきます。今後ともよろしくお願いいたします。

デザインという概念は今ではあらゆるところで求められているという気持ちでいます。効率や、そのもののあり方の仕掛けや手触りのようなそんな色々が考え抜かれ、提示されていくこと(過程)を含め。教育では授業のあり方、教師と学習者・学習者と学習者・それ以外の他者との関わり、教室のうちと外(外についてはコロナのおかげで逆に無限の広がった部分もあると思います)そんな中で今回の門倉先生のお話を伺うチャンスは(先に資料を読み込むことを含め)改めて自分の中の経験、意識的・無意識的に行っている気持ちの働き、工夫、考え方の選び方そういう様々なことがザーッと巡っていく時間になりました。

「他者のニーズ」「気づき」「自らの気づき」などのキーワードも出てきましたが、ひょっとするとこの"出会いの仕掛けのデザイン"という部分、ここに今までの経験や様々な視点の獲得を活かして取り組むことが教師側として関わる人物に強く求められる能力なのではないかと感じました。改めて考えるテーマと時間をいただきましたこと感謝いたします。門倉先生、嶋田先生、同一の時間を過ごした皆様ありがとうございます。

「学ぶ方法を学ぶ」ところから、教育を変えていく必要がある」点は、大いに痛感する部分でした。教師の教師観や学習観が変容していないという指摘もあると思います。そして、同時に学習者の教師に求める教師像であったり、学習者自らの学習観も、古くからの体質を持っている場合も多いと感じます。例えば、学習者の中には、自分の国で今まで受けてきた教育の影響が大きく、教師が協働で授業をデザインしたとしても、十分に意義を見出せず、教授することに価値を持っている学習者もいるからです。教師、学習者、どちらにも変容が求められるといえると感じます。マインドセットの育成はどのようにしたらよいのでしょうか。これは、こうすれば正解であるなど、答えにすぐにたどり着くものではないと理解しています。お話にもありましたように、部分的にでも取り入れ、少しずつでも育み、うまくいかなかったら戻って、その繰り返しによって養われる力であるのではないかと、思います。試行錯誤してみます。ことばによって発信し、ことばによって人と繋がり、ことばによって人と理解し合い共感すると考えると、教師が常に世の中をどう捉えているのか、自分のできることは何かを感じ発信していく力を養うことは、非常に重要であると感じました。「ことばの教育」としての日本語教育では、デザイン思考を日本語教育にどのように組み込んでいくのかを、まずは教師自信がデザイン思考で実践していくことが重要であると感じました。デザイン思考は、人が「共に生きる力」として養っていく力の一つであると感じます。一人の日本語教師として、自分の立場で考えると、社会的地位を見据えた言語教育をデザインし実践できる力を、自ら養う努力を怠らず、成長し続ける教師でいようと、あらためて強く思いました。ご質問にお答えいただき、ユネスコの情報もいただきまして、ありがとうございました。そして、とても勇気をいただける寺子屋でした。門倉先生、嶋田先生、ありがとうございました。